

## 体育科

### 【テーマ】 運動の楽しさにふれながら、わたしと運動の関係を創る

～ できないことをたのしみ、できることを願う子に ～

#### 0 はじめに

##### ①タイガースフィーバー



2003 年、阪神タイガースに熱中している人々は、もはや関西だけでなく、いたるところ、どの球場でも、「甲子園」化しているといっても過言ではない。このことをみていると、「タイガースは伝統がある。」とか、「18 年ぶりだから。」等々の理由だけで、今年のような熱狂ぶりは説明できないのではないだろうか。18 年ぶりの優勝という劇的さ以上に、阪神タイガースの勝利に酔いしれている人の数は多い。それは、老若男女を問わず、社会現象化しているといってもよいだろう。それだけ熱狂できるというのは、タイガースの魅力だけでなく、スポーツそのものの魅力を感じているからではないだろうか。

##### ②お気軽スポーツ

また、現代社会においての『スポーツ』は、余暇時間の増大と嗜好の多様化、健康指向から、我々にとってなくてはならないものになってきた。それに伴って、「気軽に」、「簡単に」、「楽しく」といったニュースポーツや、市民参加のイベントが増えてきている。公園などで、ウォーキングやジョギングをしている人の数をみてもわかることであろう。阪神タイガースとニュースポーツ、対極軸にあると思われがちではあるが、「観る」、「おこなう」という参加形態が多様化しているだけで、「スポーツを楽しむ」ということはかわらない。つまり、熱狂的に応援しているのも、自分の目的で参加しているのも、どちらもスポーツの楽しさなのである。

##### ③体力の増進

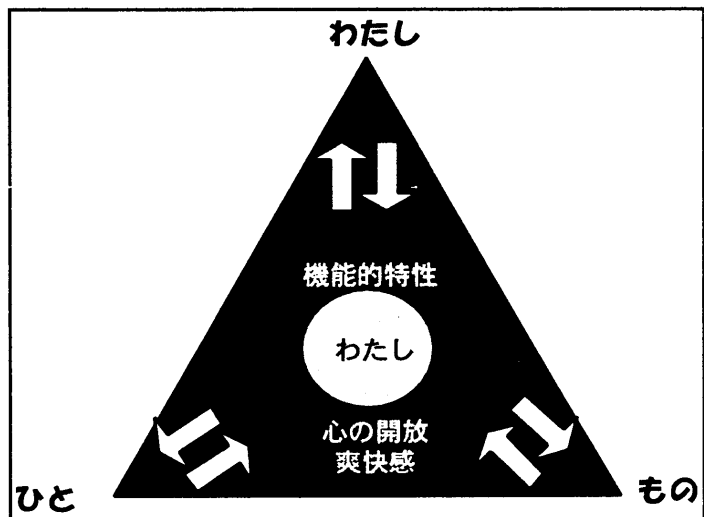
さて、視点を子どもたちに当ててみると、彼らを取り巻く生活環境により、体力低下が言われ続けている。子どもたちの遊びから、「時間」「場所」「友達」が減少し続けたことによって、昔なら遊びの中で自然と培えたはずの体力がつきにくいのも事実である。だから、子どもたちの体力の増進だけに体育科は存在していないのも周知のとおりであるが、学校体育の中で「体力」をつけていくことが目標の一つになっているのである。しかし、年間 90 時間（3 年生以上は保健も含む）の体育学習だけでは、子どもたちの体力の増進を請け負うことは難しいのが現実である。ただ、計画的に、意図的に、運動をおこなう機会を子どもたちに用意できるのは体育科しかない。

「体力」をつけることは体育の大きな目標ではないが、楽しく運動に取り組めることで、付随的に体力がついていく。それでは、楽しく運動に取り組めることの詳細を述べていくことにする。

## 1 テーマにかかわって

### (1) 体育科の学びとは

体育科は、運動との関わりを学習する教科である。わたしと運動との関係構築が主眼である。関係構築とは、運動の楽しさにふれることであり、運動の中に自分の感じる価値を見いだすことである。そこには「わたし」、「ひと」、「もの」との関係がある。(平成14年度本校紀要参照)



### (2) 体育科における学習文化とは

本校の研究テーマである「学習文化」を、体育科では以下のように考える。

今年度、「学習文化」を創る上で大切にしていけることを、サブテーマ “できないことをたのしみ、できることを願う子に” として設けた。

#### ①できないことは素晴らしいことだ

体育科は、「勝った」「負けた」とか、「できた」「できない」といった結果がはっきりあらわれる教科である。だから、「勝った」「できた」というプラスの要因を味わいやすくなる。プラスの要因は、自己の満足感と結びつき、次の意欲につながっていく。その裏返しで、「負けた」「できない」というマイナスの要因も味わいやすい。

マイナスの要因を味わいやすいという理由で、できないことを、自発的に学習していく阻害要因であると考えてきた。しかし、できないことは阻害要因ではない。できないことがあるから、「やってみたい」とか「できればいいな」というはっきりした願い（めあて）がもてるのである。子どもの中には、「できない」「苦手」「人に比べて〇〇」だから、「その運動が嫌いだ。」と考える子が少なくない。しかし、その子にとっては大きな学習チャンスであり、他の子よりも強く楽しめる可能性をもっているのである。もし、我々教師が、そのように考えられると、「できないことは素晴らしいこと（学習チャンス）」なんだと子どもも思うことができるのではないだろうか。それが、学習文化を創る上でまず必要なことであると考えている。

#### ②「やってみたい」「勝ちたい」という願い

「できないことをたのしむ」といっても、できないことで満足することではない。子どもは、どの子も運動は好きである。だから、プラスの要因を得ようとする。ここで問題になってくるのは願いの質である。ただ、なんとなく「やってみたい」とか、「できればいいな」と願うだけでは、活動へのエネルギーとしては十分ではない。「やってみたい」や「できればいいな」という願いが達成でき、次の学習への意欲づけとなり、新たな「できない」が生まれてくる。そして、また願いを達成する。それを繰り返すたびに、「できない」ことが「必ずできる」という自信に

変わり、「どこに気をつければいいのだろう」という視点の明確化や、問題の克服につながっていくのではないだろうか。自分のもった願いを達成していく過程での、粘り強さや追求心こそが体育科での学習文化だと考えるのである。

## 2 学習文化を創る上で大切にしていくこと

### (1) “起源的な楽しさ”

運動とは、我々人類が築き上げた文化遺産である。プロ化しているスポーツは、近代に今のルールがつくりあげられ、リニューアルを繰り返しながら現在に至っている。例えば、野球というスポーツでは、その頂点に立つのがプロ野球であり、メジャーリーグである。また、アマチュアスポーツでは、オリンピック（現在は、アマチュアスポーツとはいえないが。）であろう。しかし、もともとの起こり（起源）は、人間が動物としての機能（「はしる」「とぶ」「なげる（ける）」こと）を研ぎ澄ましたり、単純に相手に勝ちたいという競争本能を充足したりすることであった。つまり、人間としてそれほど難しくない運動である「はしる」「とぶ」「なげる（ける）」ことは、古代から綿々と続く運動の楽しさなのであり、基礎的な部分といってもよいだろう。それを、ここで“起源的な楽しさ”とよぶことにする。

### (2) “起源的な楽しさ”を切り口に

できないことに満足せず、できないことをできるようにしていくためには、今年度は“体育の起源的な楽しさ”を切り口にみていくことにした。それは、できないとしても、生き生きと活動してほしいという願いからである。できないことがあったとしても、「次こそやってやる。」という強い願いがみとれると考えた。また、運動のもつダイナミックさも味わえるのではないだろうか。

高学年になればなるほど、“起源的な楽しさ”は出にくくなるかもしれない。それは、力いっぱい活動することに対する抵抗感が強くなるからだろう。また、自己の目的意識がなかったら、低学年の子どもたちのように、活動だけを喜ぶということもないだろう。しかし、もし、他の子を意識し、気にしだす歳頃の子どもたちが、もっと「やりたい」とか「勝ちたい」という切なる願いが持てるようになると、活動そのものに目的がうまれてくるに違いない。それが、起源的な楽しさではないだろうか。子どもたちが、体を動かすことに抵抗感をもたず、運動することが大好きになること。しかも、クラスの中で目的意識が共有でき、共感できてくると、それが体育科で考える「学習文化」ではないだろうか。つまり、活動そのものの喜びから出発し、自分ののびや出来栄を意識でき、もっと〇〇になりたいという願いを持ち、その実現のために努力していく学級集団になればと願っているのである。そのためにも、運動の起源的な楽しみをしっかりと、恥ずかしがらずに、味わうことが大切であると考えるのである。